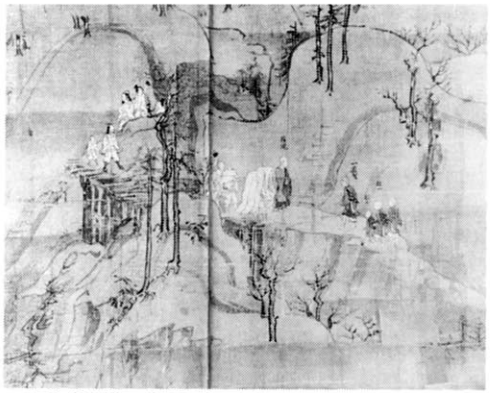
美術の窓(9)

京都国立博物館の「山水—思想と美術—」の展観を見て

大和文華館館長 吉川逸治



一遍聖絵(第三巻部分) 歓喜光寺蔵

阿弥陀二十五菩薩来迎図 知恩院蔵

京都の国立博物館は、昨年度の花鳥を主題とする特別展に続いて、今年も「山水—思想と美術」との題で、古代から江戸時代にいたる総合的な特別展を開催され、観者に色々の問題を提起し、また様々の事柄を想起する機会を授けて下さいました。私もその一人で、陳列された数々の作品のなかで、特に古代から鎌倉時代にいたる仏画や絵巻物に見られる自然の姿に感心しました。

山水画と申しますと、宋元画の影響のもとに鎌倉時代、室町時代の禅林で育成された水墨画軸や、次いで発展する雪舟らから狩野派などに及ぶ山水風景画を整備し、彩色を加え、花鳥をも包括する盛んな近世絵画の世界に導かれますがもちろん、このために実に豊富に名作が展示され、鑑賞の中心をなすところでしたが、私は、最初の二室に陳べられた古代から平安、鎌倉にいたる山水の描出に特に興味を惹かれました。

なかでも、驚嘆すべきは「一遍聖絵」の自然描出です。富士山とその麓の河原の人間生態の描出も鋭く刻み込む強さに打たれますが、上人一行が熊野詣する大場面の豊かな構成には及びません。山嶽、渓谷、瀑布、水流、樹林、山路など自然の構成要素一つ一つに確りした形態を与えて、堅牢な大地の起伏のなかにぎっしりと組込みます。人も路も建物もこの自然の大地の一部分をなし、上人とその一行が、この超人的な自然の大地のなかで、山路を辿りゆく姿は、何か超人的な力で行動させられる様子に見える。果せる哉、やがて、彼らは熊野権現の一行と出会う。この絵で感心するのは、山も谷も樹も、また人物たちも、写真で撮った形像の如くに写生され、合理的に常識的に眺められた如く描写されるのではないのですが、みな頼しい形をして、画家が想像する通りに物語の場面を構成するのです。この新しい自然の情景は、島田修二郎氏が指摘される如く、新しい宋代の絵巻物の影響が感ぜられるかも知れません。大和文華館の『文姫帰漢図巻』の悲劇の人物と自然との呼応する情景がその好例だと言われます。

しかし、熊野詣の如き山嶽風景は、古代の仏画や、その後の絵巻物の提示する山水の形態の伝統とも関連がある様子にて、この古代伝統も見逃せません。絵巻物では、「一遍聖絵」と列んで展示された「西行物語絵巻」の西行の山中行路の場面が、同じ様にヴォリュームをもって確りと描き上げられた山腹と樹林のなかを辿る西行の姿を描出します。また、「信貴山縁起」三巻は、飛倉の巻でも、加持の巻でも、尼公の巻でも、自然の描出はすばらしいものです。これらでは、人間の形姿は比較的大きく、山・谷・樹木は比較的小さく、人と自然が対話し、共存し易く作りあげます。これらの自然形像は長い過去の様々の形成過程の伝統を荷ったもので、室町水墨画の山水がもつ画家や禅僧の精神に結成される主観的な映像の性格とは異なる訳です。極端に言えば、観者がどう把握し、観察しようと、影響されることなく成立してしまって居る形式に基ずくものといえます。

そこで、この種の自然の描出形式は、色々の古い象徴的な形式と何らかの関連をもちます。何かの観念を象徴する形式ですから、宗教的自然観を象徴する形式が主となり、中心になります。蓬莱山とか、須弥山、霊鷲山とか言ったものを象どる山嶽形式は、塔の如き岩塊の如き堅牢な形態で表現されます。この山塊の裾を規則正しい海波模様が取囲み、山腹に霊雲の模様が懸る訳です。「絵因果経」には、かかるピラミッド形山嶽形式の余韻を示す山丘が処々に描かれます。

やがて、古典様式の絵画が整備されてきますと、もっと実景に近い山や水、谷、樹の形像が出来上って、象徴的な図形から自然らしい景色に移ります。しかし、依然として、これらの自然像は、それ自体存在する客観的性格を保持し続けます。ですから、寺域の図面などに、その描出形式が応用されても、余り異質な感じは起しません。神に関するものではなく、画中に気韻生動は客体として描出されるものとの意味であるとされるのです。

やがて、天平時代となって、古典様式の絵画が整備されますと、もっと実景に近い山・水・樹・人の形像が立体性をもって出来上り、実際的遠近構成のうちに組み上げられます。この自然像は、後の個人視覚(精神)のうちに結成される眺められた景観の性格とはちがって、それ自体存立する客体としての性格を保持します。ですから、寺域の図面にその描出形式が部分的に応用されますし、来迎図などの描出に適用されて、すばらしい表現を作出します。抽象を目ざす曼荼羅でさえ、この客体的自然描出から力強い肉体像の外、花や器物の形像を導入します。古代の自然像の複雑な運命に魅せられます。

季刊 美のたより No.65
昭和58年 11月 18日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.